様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２４９９

研究課題名（和文）ベルン師範学校出身教授J・イッテンの発想法教育学とワイマール期実験学校教育学受容

研究課題名（英文）J. Itten and who learned German reformative pedagogy in the 1920-30s and his contribution to the reformation of German art school

研究代表者
鈴木　幹雄（SUZUKI, Mikio）

神戸大学・人間発達環境学研究科・名誉教授

研究者番号：７０１６３００３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：芸術学校バウハウスは世界の芸術学校改革に先駆的な役割を果たしてきたが、その重要な精神はシュトゥットガルト、ヘルツェル学派の改革的精神によってもたらされ、同時に1920-30年代の実験学校教育学のアプローチの影響下に育まれた。文書資料に基づくと、同教育は1920-30年代の実験学校教育学、実験学校の体験的・探求的教育学、並びに実験学校で育まれた教育観を手掛かりとした探求的教育学等を巧みに活用したものであることが明らかになる。
ナチズム期には1920-30年代の実験学校教育学は否定されるも、同遺産は戦後の敗戦期にゲッティンゲン大学ドクトラント達によって再発見され、上記事象、中核部分が解明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
改革芸術学校バウハウスの研究は、同教育の自己探求的基礎付けという、同校教育根幹の成立事情研究を積み残してきた。
本来イッテンの芸術教育学は、シュトゥットガルト、ヘルツェル学派の改革的精神の中で育まれ、その後1920-30年代の実験学校教育学遺産に刺激を受けたものであった。一度はナチズムに否定されるが、1950年代、師範学校・新制移行期教育大学出身の教師達が研究者養成大学の大学院に進学し、彼らは、1920-30年代の教師達によって取り組まれた実験学校教育学を発掘した。本研究では、敗戦期ドイツにおけるゲッティン大学ドクトラントの研究成果を解明することにより、本科研課題テーマ根幹部が解明可能となった。

研究成果の概要（英文）：German art school, Bauhaus played world wide influences upon the reformation of international art schools and art universities. Concerning roots of it, we knew the reformative spirits of Hoelzel School in Academy of Stuttgart, but also we found out the German reformative pedagogy in the 1920-30s.
Itten managed to realize self-researching pedagogy supported by the pedagogy of German experimental schools at that time.
Under the Nazi Regime, this kind of pedagogy was depressed. But after the Second World War, some doctor students reevaluated the pedagogy. And they researched into it, for example, in the University of Goettingen. Nowadays, we are able to find the meaning of it. In our research this time, we could meet with the flexible ideas concerning the pedagogy for art education by J. Itten in the time of 1920-30s, and reevaluate it as an important academic matter for our research this time.

研究分野：教育学

キーワード：Ｊ・イッテン　発想法教育学　芸術アカデミー改革　ワイマール期　実験学校　ドイツ敗戦期　教育（学）的遺産　ゲッティンゲン大学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

１）改革芸術学校バウハウスは高等教育における芸術教育、デザイン教育、工芸・建築分野の水準の高さとその導入教育を通して、米国、ヨーロッパ諸国、日本、北欧諸国等における芸術学校改革に先駆的な役割を果たしてきた。わが国のバウハウス研究は既に約 100 年の歴史を有し、研究上の厚みを獲得してきたが、同時に理念的・思想的な方向性を志向する余り、同導入教育に多大な栄養素をもたらしたシュトゥットガルト芸術アカデミーの改革的精神影響の解明という研究課題、更にはバウハウスの導入教育(学)の形成経緯並びに同教育の自己探求的基礎付けという、同校教育根幹の成立事情研究を積み残してきた。

２）同校導入教育の重要なインパクトは、イッテンが学んだシュトゥットガルト、ヘルツェル学派の改革的精神によってもたらされた。他方、1930 年代にドイツのクレーフェルトに公設された公立繊維工芸中等学校改革実践の研究を通して、イッテンが繊維工芸教育にどのような導入教育（学）のアプローチを取り入れたか、教材、指導原理、学生作品、カリキュラム等に即して、具体的に研究された（カーリン・テーニセンの研究（1992）参照)。

その結果、イッテンの導入教育（学）は本質的には 1920-30 年代の実験学校教育学、とりわけ①実験学校の体験的・探求的教育学、並びに②実験学校で育まれたグループ学習を手掛かりとした探求的教育学を巧みに活用したものであることが明らかにされた。1930 年代に形成されるこのような実験学校教育学の輪郭こそバウハウス教育学を水面下で支えた自己探求的教育学の中心骨格であった。

２．研究の目的

1920-30 年代、教師達によって取り組まれた実験学校教育学の実践と取組みは、1930-40 年代のナチズム期の沈黙の後、戦後反省的に記録・再考・再分析されるようになる。1950 年代初頭には師範学校・新制移行期教育大学出身の優秀な教師達が研究者養成大学の大学院に進学し、同時に教育学の研究を志すようになるからである。1921 年に学問研究を志したユリウス・ゲープハルトと並んで、例えばギュンター・スロッターとヴォルフガンク・クラフキが第二次世界対大戦敗戦期に学問研究と博士学位取得を目指した。かって教育改革運動に寛容力を有したアカデミズムの教育学者ヘルマン・ノールが教授を勤め、第二次世界対大戦後にはＥ・ヴェーニガーが教育方法学の教授を勤めたゲッティンゲン大学は、その代表的な研究機関となった。

そこで本課題研究では、1920-30 年代実験学校教育学研究から得られる本研究テーマ事情と 1950 年代研究者養成大学に集まった博士課程院生達の研究動態の状況を視野に入れて、研究課題に迫ろうとした。

３．研究の方法

１）前回共同研究の成果１：シュトゥットガルト芸術アカデミーの改革的精神の受容

ドイツ語圏の研究：ドイツ語圏の改革芸術学校バウハウスの導入教育学の第一ルーツは、イッテンが 1913-16 年に学んだシュトゥットガルト芸術アカデミー、ヘルツェル学派の改革的精神にあった。1980 年代以降ドイツ語圏では、改革芸術学校バウハウスと諸外国におけるバウハウス後継学校についての研究や、戦後ドイツ語圏芸術大学改革の研究が着手された。更に 2000 年代にはヘルツェル学派の研究が深められ、バウハウス教育学の重要ルーツがより深く解明可能となった。

２）前回共同研究の成果２：1930 年代における繊維工芸学校教育の研究と 1920-30 年代実験学校教育学の受容

①ドイツ語圏の研究：本テーマに関する研究端緒は、次の２点の先行研究によって用意された。Ｋ・テーニセンの研究『イッテンとクレーフェルトにおけるテキスタイル中等専門学校ー1930 年代におけるテキスタイル・デザイン』（ 1992)、並びにゲッティンゲン大学初代教育学博士学位取得者Ｊ・ゲープハルトの 1950 年代の研究『ハンブルク教育運動の成果』（ 1955)。

②これ迄の我々の研究： 1920-30 年代の実験学校のグループ学習を活用した探求的教授学：イッテンが繊維工芸教育に取り入れた教授原理で重要な成果は、基本的に造形表現の知見と並んで1920-30年代実験学校の体験教育学とグループ学習教育学を巧みに活用したものであった。平成 28-31 年度科学研究費助成研究では、論文成果「 Ｊ・イッテンにみる繊維工芸教育と発想

法教育学の構築ークレーフェルト公立繊維工芸中等学校を事例としてー」、並びに「 ドイツ敗戦期にみる現代教育学・教育方法学の発生動態について―ゲッティンゲン大学初代教育学博士学位取得者J・ゲープハルトの基礎理論構築を手掛かりとして―」が得られた。

これら探求的教授学の輪郭を拠り所として、「バウハウス教育学」を支えた「自己探求的な造形発想教育学」という概念がより一層深く把握可能となった。そしてこの両成果を糸口として、今回申請研究課題の最重要手掛かりが発見された。

４．研究成果

論文業績

鈴木幹雄論文業績: ・鈴木幹雄「[研究ノート]戦後西ドイツにおける「範例的原理」と教育学研究再興について」,『関西福祉大学研究紀要』第23巻, pp.79-88, 2021.／・鈴木幹雄「ドイツ敗戦期にみる現代教育学・教育方法学の発生動態について(II)―ゲッティンゲン大学 学位取得者G・スロッタの「グループ授業(教授)」と教育学の「現実主義的転換」―」,『関西福祉大学研究紀要』第24巻, pp.1-12, 2022.／・鈴木幹雄「ドイツ敗戦期にみる現代教育学・教育方法学の発生動態について(III)―ゲッティンゲン大学 博士学位取得者G・スロッタにみる教育学研究コンセプト「教育学的事実研究」―」,『関西福祉大学研 究紀要』第25巻,pp.1-12, 2023.／・鈴木幹雄「敗戦期ゲッティンゲン大学学位取得者にみる現代教育学・教育方法学の形成動態について(IV)―J・ゲープハルト,G・スロッタ,W・クラフキ達の1950年代研究業績とそこに浮かび上がる戦後 教育再建への同時代の情熱」,『関西福祉大学研究紀要』第26巻, pp. 1-10,2024.

加藤 明論文業績: ・加藤 明:「口卒啄動機と開示後入からの授業づくりの構築ー「開く」授業による授業改革」」,教育実践方法学研究On Line Journal, 第6巻, pp.1-8, 2020.／・加藤 明:「新しい時代に必要となる『資質・能力』を育成するための教育方法のあり方教育方法の あり方」,教育実践方法学研究,第8巻, pp.1-10, 2022年.

大関達也論文業績: ・大関達也「他者の立場から理解することを学ぶ教養教育 ―哲学的解釈学の観点から―」,兵庫教育大 学研究紀要 第60巻, pp.1-10, 2022.

阿部 守論文業績: ・阿部 守「柏崎栄助『沖縄日記』に関する考察―研ぎ澄まされた感性の人」大学美術教育学会『大学 美術教育学会誌』, pp.9-16, 2023.

学会発表

・鈴木幹雄「ものを結びつける」活動から子ども達の探究活動へ2021」, 日本乳幼児教育学会第31回大 会発表(於福山市立大学),2021.12.4. ・鈴木幹雄「敗戦期ゲッティンゲン大学学位取得者にみる現代教育学・教育方法学の発生動態について ーJ・ゲープハルト,G・スロッタを手掛かりにー」,教育哲学会65回大会(於慶応大学),口頭発表,2022.10.22.／・鈴木幹雄「フランス人幼児教育(学)者A・シャルノーは近年レッジョ・アプローチをいかに解釈・把 握したか」,日本乳幼児教育学会第33回大会(於名古屋市立大学), 口頭発表, 2023.12.09.

・阿部　守個展, 「火炎鉄」(いりや画廊、東京都台東区北上野2-30-2), 2024.4.4-16.

出版物

・鈴木幹雄著『 20 世紀ドイツにおける造形表現研究と発想法教育学―シュトゥットガルト、バウハウス、イッテンの系譜―』, 風間書房, p255, 2020.

・鈴木幹雄他, キャシー・ワイズマン・トッパル著,鈴木幹雄,三木健郎編著『材料を探求する幼児の表現 活動ー米国レッジョ・エミーリア受容に学ぶ様々な材料を手掛かりに行われる活動ー』, あいり出版, p165,2023.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 鈴木幹雄	４．巻 25
２．論文標題 ドイツ敗戦期にみる現代教育学・教育方法学の発生動態について(Ⅲ)―ゲッティンゲン大学博士学位取得者G・スロッタにみる教育学研究コンセプト「教育学的事実研究」―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 関西福祉大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 加藤　明	４．巻 8
２．論文標題 新しい時代に必要となる『資質・能力』を育成するための教育方法のあり方教育方法のあり方	５．発行年 2022年
３．雑誌名 教育実践方法学研究	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 阿部　守	４．巻 55
２．論文標題 柏崎栄助『沖縄日記』に関する考察―研ぎ澄まされた感性の人	５．発行年 2023年
３．雑誌名 美術教育学研究	６．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木幹雄	４．巻 25
２．論文標題 ドイツ敗戦期にみる現代教育学・教育方法学の発生動態について(Ⅱ)―ゲッティンゲン大学学位取得者G・スロッタの「グループ授業（教授）」と教育学の「現実主義的転換」―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 関西福祉大学紀要	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大関達也	4．巻 60
2．論文標題 他者の立場から理解することを学ぶ教養教育 ―哲学的解釈学の観点から―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 兵庫教育大学紀要	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木幹雄	4．巻 24
2．論文標題 [報告]戦後西ドイツにおける「範例的原理」と教育学研究再興について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関西福祉大学紀要	6．最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木幹雄	4．巻 24
2．論文標題 [情報]アメリカ教育学者C・W・トッパルにみる現代ヨーロッパ幼児教育学受容についての一考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関西福祉大学紀要	6．最初と最後の頁 111-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤 明	4．巻 5(1)
2．論文標題 情報を引き出し、整理、統合しての仮説的推論（アブダクション）による問題解決力を育てる教育方法―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育実践方法学研究	6．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤 明	4．巻 1
2．論文標題 口卒啄動機と開示後入からの授業づくりの構築ー「開く」授業による授業改革ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育実践方法学研究 On Line Journal	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 鈴木幹雄
2．発表標題 『ものを結びつける』活動から子ども達の探究活動へ
3．学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会発表（2021.12.4))
4．発表年 2021年

1．発表者名 鈴木幹雄
2．発表標題 敗戦期ゲッティンゲン大学学位取得者にみる現代教育学・教育方法学の発生動態について ーJ・ゲープハルトハルト,G・スロッタを手掛かりにー
3．学会等名 教育哲学会65回大会(於慶応大学),口頭発表,2022.10.22.
4．発表年 2022年

1．発表者名 鈴木幹雄
2．発表標題 フランス人幼児教育(学)者A・シャルノーは近年レッジョ・アローチをいかに解釈・把握したか
3．学会等名 日本乳幼児教育学会第33回大会(名古屋市立大学)，口頭発表，2023.12.09.
4．発表年 2023年

１．発表者名 阿部 守
２．発表標題 阿部 守個展，「火炎鉄」
３．学会等名 個展，「火炎鉄」(いりや画廊、東京都台東区北上野2-30-2)，2024.4.4-16.（招待講演）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計2件

１．著者名 キャシー・ワイズマン・トッパル,鈴木幹雄,三木健郎	４．発行年 2023年
２．出版社 あいり出版	５．総ページ数 161
３．書名 材料を探求する幼児の表現活動-米国レッジョ・エミーリア受容に学ぶ様々な材料を手掛かりに行われる活動ー	

１．著者名 鈴木幹雄	４．発行年 2020年
２．出版社 風間書房	５．総ページ数 255
３．書名 20世紀ドイツにおける造形表現研究と発想法教育学―シュトゥットガルト、バウハウス、イッテンの系譜―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	加藤　明 (KATOU Akira) (30258256)	関西福祉大学・教育学部・教授 (34525)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大関　達也 (OUZEKI Tatuya) (80379867)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	阿部　守 (ABE Mamoru) (60167947)	福岡教育大学・教育学部・名誉教授 (17101)	阿部 守氏は、東京教育大学で、バウハウス教育学をドイツ留学者から直接学んだ研究者。退職に伴い、研究分担者から外れたが、比類なきバウハウス・構成教育者である為、研究協力者への参加が要請された。

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関